

## 幸福な万葉学を更に幸福に

折 口 信 夫

新しく組織せられた上代国文学会と、伝統久しい国学院大  
学とが、この夏期の共同事業として、万葉集講座を開かうと  
するのです。

学問は常に新しくなくては、そこに変化、發達はありませ  
ん。だが其と同時に、伝統が磨きあげられてゐるのでなければ、  
われわれの学問はいつまでも、足躰みを續けてゐること  
になります。

新しい学問上の感覚を、確乎たる伝統の中に持ち来さうと  
する情熱を、この事業の上に見て頂かねばなりません。

昭和の戦争期に先だつて、国文学界には、理念といふ語  
が、頻々と使はれてゐました。国文学者は、必ずこの問題に  
反省を持たなければならぬといふ感じがしたものです。かう  
言ふ考へ方で、とりわけ之と關係のあつたのが、万葉集研究  
でありました。

だから、この方面では、理念と倫理感が一つになつてう  
け入れられる傾きが多かつたのです。万葉集を學ぶること  
は、日本人道念の由つて来る所を、追尋することになるの  
だ、と言はず語らず、學者は皆考へるやうになつてゐまし

た。此には全般的に、万葉調短歌作家の協力があつて、幸運  
の民族文学とも言ふべきものが、目前にあると言ふ氣のした  
ものです。今はもう、学問がさういふ單純な目的を目ざすも  
のではない、といふことが、明らかにになりました。

源氏物語のやうな小説性古典文学においては、その表現す  
る生活面の広さの為に、さう簡單にうけ入れられなかつたこ  
ともあります。併し其等一種の不運な文学も、戦争後の精神  
の自主時代になつて、一挙に勢ひを盛り返しました。源氏物  
語研究はじまつて以来、此ほど旺盛な姿を見たことはない  
と思はれる程です。

思へば万葉集は、最安全な位置を占めた民族文学だと思ふ  
ことが出来ます。さういふ幸運を持つて産れたものが、我が  
ら其を避けてとほる理由はありません。

併しながら、万葉集研究の将来について、若干の問題があ  
るにはあるのです。永久に解決のつきさうもない「莫囂円  
隣」のやうな題目や、又何時までも解釈を深めて行かなくて  
はならぬ単語や句、それから、品物・地理、歴史などに関す  
る懸案は、今後幾年容易に解消しさうもありません。かうい  
ふ方面は、従来の研究を、そのまま継承して行く外はありま  
すまい。

併し一方、新しい方法が開けた為に、今まで問題にもなら  
なかつた点に、新しい疑念や、解決の端緒が出て来ることも  
あつて、万葉研究は、半永久に有望であり、學者として苦

勞の尽きる時が、見越されないものがあるのです。

我々と時を同じくする氣の鋭い人々の中には、古代經濟學その他の理論で、すべてが解説出来るものを、従来、さう言ふ方法を敏く利用しなかつた所に、智慧の蒙昧があるのだと申す衆があります。

さう言ふもの言ひで、古典研究の方法を導入しようとするのを、よく見かけますが、さう言ふ行き方からは、私どもは、失望させられることが多かつたのです。私どもは、日本の古典を研究するのですから、日本の古典が持つてゐる特殊性を、まづ見出して来なければなりません。

比較文學など言ふ新しい学が行はれてゐます。私どもも、最興味と、信頼とを寄せてゐるものですが、各国、各民族の文學の類似点の広さを見ることの上に、どういふ相違を、各民族共通の人間素質の上に出して来てゐるかを見ることが、此新学に分担してほしい部分なのです。

万葉集を読むといふことは、どんな場合にも、古人の得た結果だけを復習することを目的とするのではない。何としても、先輩の收穫から一步でも余計に乗り出してゐなければならぬと言ふことなのです。

古い方法によつてするもの、新しい態度から得るもの、行き方は違つても、万葉學に寄与するといふことでは、同じことになりません。

だが望めることなら、今までの行き方と違つた踏み出しに

よつて、全く新しい万葉開拓の方向を示して貰ひたいものです。

こんな望みを、あなた方、今度の万葉講座にお出になつた方々に申す理由は、われわれ老輩が、著実な方法によることを、ものうしとしてゐたことの、償ひをしようとするところにあります。今も言つたやうな、てつとり早く見える方法論などを、ふり撒いて歩く人たちの考へ方から獨立して、はつきりとした、古典學の目を開いて貰はう、と言ふところに、実はあるのです。

雪のこる会津の沢に、赤きもの——根延はふしどみは かたまり  
咲けり

葛の花踏みしだかれて 色あたらし——。この山道を 行きし  
人あり

島の井に 水を戴くをとめのころも——。その襟細き胸は 濡  
れたり

わたつみの豊はた雲と あはれなる 浮き寝の昼の夢と たゆ  
たふ

邑山の村の木むらに 日はあたり、ひそけきかもよ。旅びとの  
墓

——「海やまのあひだ」より——